

論文審査の結果の要旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 1121 号	氏名	切石 健輔
学位審査委員	主 査 村田 比呂司 副 査 藤原 卓 副 査 中村 渉		
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>1 研究目的の評価</p> <p>咬合刺激が海馬を中心とした中枢神経系活動を高める可能性が示唆されている。人を対象とした先行研究は、記憶能力、実行能力など、限られた種類の認知機能は明らかになっているがその他の脳機能、とりわけ知覚機能との関連性を分析した研究は存在しない。また、既存研究の大半は壮年から高齢者を対象としており、小児を対象とした研究は少ない。本研究では、発達途上にある思春期前期の男子生徒を対象に、咬合力と視覚的な運動情報の知覚能力との関連性を分析しており、目的は十分に妥当である。</p> <p>2 研究手法に関する評価</p> <p>Motion Coherence 課題を用いて、視知覚機能の指標として広く用いられる大域的運動コヒーレンス閾値を計測した。咬合刺激の指標として、咬合圧フィルムを使い、咬合力を測定した。さらに、交絡因子となる可能性がある有酸素運動能力等の全般的運動能力測定もあわせて実施した。バイアスを可能な限り除外するようにデザインし、更に種々の統計学的解析法で解析したもので、研究手法も妥当である。</p> <p>3 解析・考察の評価</p> <p>上記手法で解析した結果、各変数の効果を統制後も咬合力のみが、大域的運動コヒーレンス閾値の有意な予測変数と同定された。このように、交絡因子である年齢や有酸素運動の影響を統制した後にも、重回帰分析の結果は大域的運動コヒーレンス閾値と咬合力の間に有意な負の相関関係があることが示唆された。</p> <p>以上のように本論文は咬合力と知覚機能との関連に関する研究に貢献するところが大きく、審査委員は全員一致で博士（歯学）の学位に値するものと判断した。</p>			